



日本の伝統の音色を育む

大瀧進一郎さん 株式会社大瀧邦楽器 代表取締役社長

プロフィール：東京都深川区（現在の江東区）生まれ。
1966（昭和四一）年、株式会社大瀧邦楽器の代表取締役社長に就任。三代目となる。
箏、三味線、尺八といった邦楽器全般を取り扱う総合卸商。
毎月、「邦楽ニュース」を発行して邦楽界の情報を発信するなど、業界全体を牽引している。
大瀧邦楽器ホームページ：http://www.otakihogakki.com/

■121年間、 邦楽器の製造を担い続ける



▲大瀧邦楽器の作業風景

「ほかの仕事？ 考えたこともないですね」
大瀧邦楽器は、1885（明治十八）年に大瀧力太郎さんの個人経営からスタートした。場所は、東京の下町・深川。江戸時代から商業地、花街としてさかえ、この地の芸者は「辰巳芸者」と呼ばれ、粋で気風がいいと言われていた。貯木場でもあったため、大瀧邦楽器も最初は、箏や三味線の原材料の卸商からはじめている。その後、三味線の胴造りも手掛け、1936（昭和十一）年、業界初の機械化をはじめた。

戦後、焼け野原になった深川の地をあとにし、杉並区へ移転。新しい地で商売を再開し、さらに独自の技術で機械化を進め、業界の注目を集めた。進一郎さんが代表取締役社長に就任した後は、日本各地や海外に工場及び営業所を開設。長い年月の中で培われた技術を活かし、事業の拡大に努める。機械による量産化を進める一方で、伝統的な手作りのノウハウを後世に伝えるため、名人や細工師の育成にも力を注いできた。ただ、こまかな細工が施された邦楽器をゼロから手作業で作るのは時間がかかる。たとえば箏であれば、荒甲（原木を箏用に挽き、乾燥させ

たもの）から始めても10日～2ヶ月は必要だ。ひとりの職人が、月に1面、2面しか作れないようでは食べていけない。それは現在、分業化が進んでいる理由のひとつでもある。

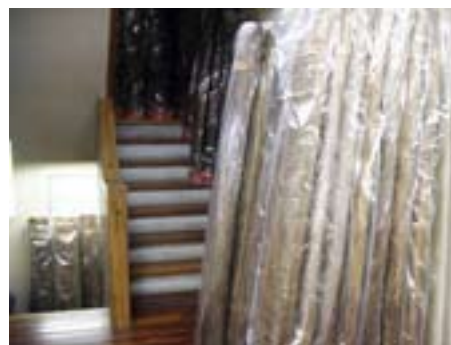
「邦楽器に限らず楽器づくりの面白さは、いい音が出せたときです。箏などは、楽器としてだけでなく、装飾的な要素も強い。使う材料や細工によって値段が大きく違うんです。でも、ある一定の金額を越えたものなら、あとは細工次第。音だけで言えば、高いものだからいい音が出るとは限らないんです。最初からいい音が出る場合もあれば、弾きこんでいくうちに良くなるものもある。演奏者との相性もあります。悪い部分を直して、いい音が出たときは、楽器屋冥利に尽きますね」

邦楽器づくりは面白い反面、ほとんどが天然の材料を使用しているため、ひとつとして同じものが作れない難しさがある。いままで使っていた楽器が古くなり、壊れてしまったら、同じものは二度と手に入らない。だからこそ、熟練した職人によって、少しずつ直しながら何代にも受け継がれていく楽器なのだ。

1975（昭和五〇）年に発効されたワシントン条約では、細工に使われる鼈甲（べっこう）や象牙の輸出入の規制がされ、材料の手配も難しくなっている。木材や皮もそのときどきで性質が異なり、その見立てで完成の良し悪しが決まってしまう。

月に一度、八王子や中国、タイの工場を訪れ、楽器の仕上がりに目を光らせる進一郎さん。常にまなざしの先には、美しい日本の伝統の音色を奏でる邦楽器の姿がある。

■学校教育の現場に邦楽器を



▲ずらりと並ぶ邦楽器

1998年、文部省（現文部科学省）は学習指導要領を改訂し、2002年度から「中学校においては、3年間を通じて1種類以上の和楽器を取り扱うこと」を義務付けた。小学校でも積極的に日本の音楽を教材に盛り込むよう、指導目標を掲げている。

明治以降の日本の音楽教育は、ヨーロッパのクラシック音楽を中心に行ない、この改訂までおよそ130年あまり、邦楽は学校教育の現場から姿を消してしまっていた。

大瀧邦楽器では、品川区教育委員会と提携し、品川区の全中学校で邦楽の授業のサポートを行なっている。今年からは、同区的全小学校でも5年生のときに邦楽の授業を始めることになった。地元の楽器店に搬入や調絃などを委託し、邦楽器の貸し出しをする。講師やカリキュラム作成は、懇意にしている演奏家の方々にお願いし、本格的な授業を行なう。

「日本では、これまで自分の国の楽器や音楽に触れる機会がほとんどなかった。多くの子どもたちが、学校教育の現場で少しでも学ぶことで、業界全体がいい方向に進んでいくと嬉しい」

、

昭和40年代の民謡ブーム以降、邦楽器が注目を集めることは少なくなった。現在、吉田兄弟など若手の演奏家が海外で活躍しているが、まだまだお年寄りや一部の家元の人の楽器というイメージが強い。誰もが学校で邦楽器を学び、より身近な楽器として、幅広く浸透していくことを願う。

■ 良い観客は、良い演奏家を育てる



▲美しく仕立てられていく三味線

大瀧邦楽器では、1976(昭和五一)年に「日本の伝統音楽を守る会」を発足。邦楽器の製造技術や伝統音楽の普及、後継者の育成に取り組んできた。邦楽界の情報を発信する『邦楽ニュース』も、このときから毎月発行されている。また、現在は終了してしまったが、当時は全国主要都市で「日本の楽器テレホンサービス」を実施。邦楽器のイメージを一般に浸透させるため、テレホンカードも同時に発売し、電話をかけると3分間10円で日本の名曲を聴くことができた。1988(昭和六三)年の6月6日(邦楽の日)には、第1回「邦楽の日」記念講演会を開催。伝統音楽の展示会なども行なった。「邦楽の日」は、1985(昭和六〇)年に東京邦楽器商組合(現在の東京邦楽器商工業協同組合)が制定した記念日で、むかしの子どもたちが、6歳の6月6日を手習いの開始日として、しつけの一環で三味線や箏を習い始めた風習にちなんでいる。

その後、邦楽教育を推進する会(後の邦楽教育振興会)が主催する「こども邦楽まつり」などの演奏会を後援。1992(平成四)年からは、「日本の伝統音楽を守る会」の主催で、毎年「気軽にオンステージ邦楽演奏会」を行っている。

「演奏の機会がないと、演奏する人も張り合いがありません。上手く弾けるようになって

も、ただの自己満足で終わってしまう。良い観客がいれば、演奏家も育つ。多少の金銭的な負担や会場の手配などの手間はありますが、演奏会を行なう意味は十分にあると考えて続けています」

おもに会場は、地元である杉並区のセシオン杉並ホールを使用。1999(平成十一)年頃からは、杉並区教育委員会も後援している。

「ただ、あまり演奏会などには顔を出さないようにしています。大瀧邦楽器で作った楽器に糸を締めたり、いのちを吹き込むのは楽器屋さんと演奏家の人たちの仕事。うちは、楽器屋さんでは手が回らない分野を少しお手伝いしているだけですから」

あくまでも謙虚な姿勢で裏方に徹する進一郎さん。夢は演奏会の会場をいっぱいにすることだ。

「演奏会を開いたら満席になるぐらい、邦楽器を演奏する人がたくさん増えるといい。関係者で席が埋まるんじゃないくて、“申し訳ないのですが、本日は満席で、もう切符がありません”って断ってみたいですね」

ただ、伝統を担っているという重荷はほとんどないという。邦楽は子どもの頃からずっとそばにあり、考えたり、迷ったりするヒマもなく、夢中で業界に携わってきたと話す。いつか進一郎さんが、満席の会場で微笑む顔がみたい。

(文：佐竹未希)